「若者を生き返らせたパウロ」　　２０２６年１１月１日　　主日礼拝
使徒言行録　第２０章７～１２節

今日の聖書の箇所には、眠りこけて３階から下に落ちて死んでしまったエウティコという青年がパウロによって生き返らされる出来事が記されています。ここで最初に注意をしておきたいことがあります。この青年が生き返らされた出来事は、イエス様がよみがえられた「復活」とは違うということです。エウティコは復活したのではなく蘇生したのです。死んだ命が一旦、取り戻された。けれどもエウティコはやがてまた、時が過ぎれば死んでしまいます。この世の命はたとえひとたび取り戻されたとしても、必ずまた失われていくのです。イエス・キリストの復活は、そうではありませんでした。イエス様が復活され、私たちにも賜ってくださる復活の命とは、この世の命が取り戻されることではなく、私たちの命がまったく違う質の命へと変えられていくことなのです。たとえこの世の命は取り戻されたとしても、それでいっとき死が遠ざかったとしても、やがてまたこの世における肉体の死は必ずやってきます。それは「死」を克服したのではなく、ただ単に死の時期が遠ざかっただけなのです。イエス・キリストの復活は、それとはまったく違うものです。たとえこの世の命が滅びても、決して滅びることのない神様との関係。この世の命が終わっても、終わることのない神様との関係。その永遠の命に生きることが「復活」なのです。

ヨハネによる福音書１７章３節に、イエス様が永遠の命について語られた箇所があります。新約聖書の２０２ページです。そこでイエス様は、こう語っておられます。「永遠の命とは、唯一のまことの神であられるあなたと、あなたのお遣わしになったイエス・キリストを知ることです」。唯一のまことの神。それは、天と地を造りこの世界を造り私たち一人一人を造られたお方。私たちの命の基であるお方。そのお方を知ることは、私たちの命がどこから来たのかを知るということ。また、天地創造の神様が遣わしてくださったイエス・キリストを知るということは、私たちの罪を十字架で贖ってくださったお方を知るということ。すなわち神とイエス様を知るということは、私たちの命の造り主と贖い主を知るということ。そして、ここで使われている「知る」ということは、単に頭で知識として知ることではなく、深い交わり、親しい交わりの中に入れさせていただくことを意味します。ですから、永遠の命というのは、それまで自分の命の造り主や贖い主を知らないで生きてきた命が、命のまことの造り主であり贖い主であるお方を知り、そのお方と深い交わりの中に置かれる新しい命に生きること。私たちの命が永遠に無くならないのではなく、命の質が変わることであり、そしてこの関係、まことの造り主である神様とまことの贖い主であるイエス様との関係は、たとえこの世の命が亡くなったとしても、決して無くなることのない関係である。それが永遠の命なのです。ですから、今日の聖書の箇所でエウティコがパウロによって生き返らされた出来事は、単にこの世の命が少しだけ生き延びた出来事であり、それは永遠の命をいただいた出来事と明確に区別されなければなりません。エウティコの命は蘇生され、やがてまた死んでいきます。けれども、復活されたイエス・キリストは、決して死ぬことはないのです。

わたくしごとになりますが、私はかつて、大学院時代に親友を失ったことがあります。彼の葬儀は仏式で行われました。本当にたくさんの友人たちが弔問に訪れる中、特に親しかった私は、葬儀の一番前の席に座ることが許されました。そのころの私はまだキリスト

教をまったく知りませんでしたが、そんな私でも仏式の葬儀はとても嫌なものがありました。お坊さんが木魚を叩きながら念仏を唱える。ゴンゴンゴンゴンと鳴り響く木魚の音が私に向かって、まるで「彼はもう帰ってこないのだ」と諦めさせるかのように響いてくるのです。私はその時、「木魚を叩かないでくれ」とお坊さんに飛び掛かりたくなる衝動を抑えるのに必死でした。木魚の音が、彼を手の届かないところへと追いやってしまう。木魚の音が、私の心に「諦めろ」という叫び声になって響いてくる。あの時の思いは、いまだに忘れ去ることができません。葬儀は残された家族を慰め励ますと同時に、死によって終わってしまったその人の人生をきちんと終わらせるための式なのでしょう。終わりを終わらせるための儀式。それが葬儀です。

ところが、イエス様はこう言われるのです。「わたしを信じる者は、死んでも生きる」。死んでも生きる、とはいったいどういうことなのでしょうか。それは、この世の「死」が決して終わりではないことを意味します。「死んだら終わり」ではない。死んですべてが終わるのではなく、むしろそこから新しい命が始まるのです。「死」によってすべてが終わりだと思っていた私たちに、それは終わりではなく始まりなのだ、と告げること。それは新しい命、永遠の命の始まりなのだ、とイエス様は教えてくださるのです。新しい命の始まり。それが決定的に起こったのが、イースターの出来事、イエス・キリストの復活の出来事でした。

それでは､今日の聖書の箇所に出てくるエウティコが生き返らされた出来事というのは、いったい何だったのでしょうか。私はこんなふうに思います。

先ほど、私の大学院の友人の葬儀の話をいたしました。彼は私の人生の中で唯一、親友と呼ぶことができる友人でした。彼は、自分のことを「偽善者」と呼んでいました。たとえば、赤信号でも車が来ないときに、私は車が来ないのに赤信号は無意味だと言って渡ってしまうのですが、彼はきちんと赤信号を守りました。でも本当は彼も、車が来なければ信号を守って待っているなんて無意味だとわかっているのに、それでもきちんと信号を守る。そんな自分のことを「偽善者」と呼んでいました。私も赤信号は守りませんでしたが、自分のことを偽善者だと今でも思っていますので、そんな彼ととても気の合う友人となりました。よく二人だけで夜中に屋根の上に登って彼のギターの伴奏で歌ったり、二人で旅行に出かけたりもしました。

大学の４年になった頃、私は市民合唱団に入りました。その合唱団では歌を歌ってボランティア活動をしていました。薬害のスモン病患者さんたちのところへ行って歌で励ましたり、目の不自由な人たちのところで歌ったりしていました。そしてその活動がとても楽しくなり、ろくに大学も行かなくなりました。そんな私のことを真剣に心配してくれたのが彼でした。彼は何度か私に忠告してくれました。しかし、私は彼のいうことには耳を傾けませんでした。私は合唱団の活動を続けるために就職もせず、大学院へ進みました。

彼も大学院へ進みましたが、彼にはとても大きな夢がありました。彼は小学生の頃、心臓の大きな手術を受けたそうです。それはほとんど助かる見込みのない手術でしたが、奇跡的に助かった彼は残りの生涯を人の役に立つために用いたいと願い、核融合の研究を始めました。核融合は原発の核分裂のように放射線を出すことがない夢のエネルギーです。彼はその研究に携わるために大学院に進みました。そして私は同じ大学院に進みながら、

相変わらず大学にはほとんど行かず、合唱団に入り浸っていました。

彼は大学院に行ってからもずっと私のことを心配してくれましたが、私はそんな彼の気持ちなど、全然理解しませんでした。そんなある日、私は合唱団の人たちと演奏会に出かけ、その晩打ち上げに行き、そのまま合唱団の友人の家に泊まりました。翌朝、私が下宿に帰ってくると、玄関のドアに電報が張ってありました。なんだろうかと思ってあけてみると、そこにはこう書いてありました。「Y、死す、すぐ連絡よこせ」。

えっ、これはいったい何が書いてあるんだろう。私には、なんのことか、さっぱり理解できませんでした。すぐさま大学へ行くと、彼はその前の晩、大学の研究室で亡くなっていました。自殺か、他殺か、事故死か、よく分かりませんでした。結局、警察は自殺と断定したのですが、私は彼が自殺するなんて信じられませんでした。幼いころ、助かる見込みのなかった心臓の手術を受け、残りの人生を他の人のために役立てようと考えていた彼が、自ら命を絶つわけがありませんでした。

親友をこんな形で突然失った私には、消し去ることのできない事実だけが残りました。それは、私が大学に戻ってくることを一番望んでいてくれた彼がこの世での命を失おうとしていたとき、彼が死を目の前にもがき苦しんでいたそのときに、私は合唱団の友人たちと飲んだくれていたという事実です。私が彼の忠告を聞いて大学院に戻っていたなら、彼は死なずに済んだかも知れない。彼を殺してしまったのはこの私なのだ。あれから４０年以上たった今でも、私はいまだにその思いを断ち切ることができないでいます。

彼の葬式の時、憔悴しきった私の姿を見て、まわりの友人たちは後追い自殺でもするのではないかと思ったそうです。しかし、私はまだ生きています。彼の死によって大学院を辞めた私は、外資系の半導体メーカーに就職し、アメリカに仕事で行ってクリスチャンになりました。日本に帰ってきて会社を辞め、牧師になりました。彼の死がなければ、私は牧師になるどころか、クリスチャンにもなっていなかったことでしょう。

私は、彼の命の上に生きています。彼の命の上に生かされています。今日の聖書の箇所に出てくるエウティコも、一度失われた命が、もう一度取り戻された。そのことで、残りの人生の生き方が変わっていったのではないでしょうか。そしてそのことは、エウティコを生き返らせたパウロ自身の伝道活動にも、大きな励ましと慰めを与えたことでしょう。伝道旅行を続けていたパウロは、各地でたいへんな妨害に遭います。ギリシア神話の神々がうごめいているあの地域において、キリスト教の伝道は極めて困難でした。パウロは幾度となく、命の危険に遭います。そんなパウロにとって、パウロを通して死んだエウティコを生き返らせてくださった神様の働きは、困難を極めたパウロの伝道旅行にも大きな希望の光を与えたのではないでしょうか。エウティコの生き返りによって、死者をも生き返らせてくださる神様の力を体験することで、パウロ自身が生き返らされた。パウロ自身が励まされ慰められたのではないでしょうか。

今、私たちが生きている世の中は、ますます混沌としています。自然災害や戦争という命を脅かすニュースだけではなく、私たちを精神的にも苦しめる情報漏洩の話や詐欺のニュースが後を絶ちません。この先、私たちの世界はいったいどうなるのだろうと心配が絶えません。けれども私たちは、こんな世の中だからこそ、私たちの命の基である神様と罪を贖ってくださるイエス様を信頼して、信仰の歩みを共に強めていきたいと願います。

お祈りしましょう。